

第1回経済学史学会賞受賞作講評

村松茂美『ブリテン問題とヨーロッパ連邦 ——フレッチャーと初期啓蒙』

京都大学学術出版会，2013年

本書はアンドルー・フレッチャー（1653-1716）の研究である。フレッチャーはスコットランドの愛国者として18世紀にはかなり有名で、ルソーは彼の伝記の執筆を勧められたとの挿話があるし、ヒュームもスミスも彼の『政治著作集』（1737年のエディンバラ版）を所蔵していた。

最後のスコットランド議会の議員で、コモンウェルスマン（C, ロビンズ）とされるフレッチャーは、スコットランドの独立を保証する連邦的合邦は容認したが、イングランドに吸収される統合的合邦には反対した。モンマスの乱（1685）に加担した彼はスペインに亡命し、大陸の戦役に加わり、ジュネーヴ、ドイツ、オランダなどを流浪したのち、オレンジ公ウィリアムと共に帰国した。名誉革命である。彼は、ヨーロッパの商業化は不可避だが、常備軍を擁する世界君主政と国家理性に直面したゴシック的均衡（封建社会）は維持できぬという歴史認識——ハリントンを一歩進めた、友人のロックにもない認識——に到達した。

フレッチャーをネオ・ハリントニアンとしたポーコックは（*The Machiavellian Moment*, 1975）、フレッチャーをシヴィック・ヒューマニズムという近代ヨーロッパの文脈と大ブリテンのオーガスタン論争の文脈で論じた。この解釈をスコットランド啓蒙の「富と徳」の文脈のなかで彫琢したのがJ. ロバートソンで（*The Scottish Enlightenment and the Militia Issue*, 1985）、彼は『フレッチャー政治著作集』（1997）も刊行した。2007年頃には合邦300年を記念する研究が多数刊行された。以上の研究史が本書の前提である。

著者は1987年のエディンバラ留学でフィリップソンの指導下、フレッチャー研究を開始したから、本書刊行の2013年には25年有余の研鑽を積んでいた。16本の論文を基礎とする本書は成るべくして成った本格的な研究である。

本書もフレッチャーをシヴィック的伝統から理解するが、ロバートソンと違って、スコットランド啓蒙を過度に意識せず、大ブリテンとヨーロッパの文脈を重視し、ホントを継承して世界君主政と国家理性との対決をフレッチャーの重要な主題とみる。

第1章のイングランド常備軍論争ではトランドの商業肯定・民兵支持、フレッチャーの反商業・民兵支持、デフォーの商業推進・常備軍支持の相違を明確にし、第2章ではスコットランドの歴史叙述と国制論を取り上げ、ブキャナン、リドパス、シートン、クラーク等を登場させて「古来

の国制と封建法」(ポーコック)という馴染みの論争のスコットランド版を描く。第3章は奢侈と貧困が主題で、外国貿易、ダリエン計画、家内奴隷制、農業改革の展望を論じる。結論は適正規模の自由土地保有(アロディアル)農業の創出である。以上が第I部。

第4章は世界王国が主題で、ロアン、テンブル、ダヴナント、リドバス、トランドとフレッチャー『スペイン論』の見解を対比する。彼は陸の帝国も海洋帝国も人口とインダストリを損なうから専制と奴隷制に終わると結論する。

第5章は『対話の説明』から大都市の腐敗、王権制限論、包括的合邦批判、アイルランド政策、国際平和論を論じる。彼の有名なヨーロッパ10分割案には、クリュセヤシュリ、ウィリアム・ペンの先駆案があることも紹介される。貿易に拠る海洋帝国は富と人口の集中によって習俗を腐敗させるが、農業主義的経済は富の平等分配によって健全な生活に導く。また野心が活躍する共和政体と議会は公共善に貢献でき、独立した議会は市民的美德と国民的自律を可能にする。こうして『対話』は従来の断片的議論を越えた体系となる。

第6章はブリテン問題と国家理性を論じる。ブリテン問題とは、富と徳の問題でもあれば、複合君主政国家を構成するイングランド、スコットランド、アイルランド(後にアメリカ)の関係の問題でもある。議論は富と徳からブリテン帝国の形成、シヴィック・ヴァーチャーから国家理性へと進む。論争にブラックやシートン、モリノー、ブルースター、マックスウェル、トランド等が登場する。ペティの政治算術に出会ったフレッチャーは『対話』において商業文明理解を深化したと著者はみる。ホントは彼を新マキアヴェッリの政治経済学の批判者としたが、本書は彼がペティを介して国家理性を克服し、愛国者が世界市民であるヨーロッパの諸国家体制を構想したとする。

終章は合邦から啓蒙への展開を描くが、スコットランドに限定され、ブリテンとヨーロッパのその後が描かれないので、議論がスコットランド啓蒙に回収されたかの憾みが残る。フレッチャーの描く世界と違うアダム・スミスの庶民の労働の世界が成立した。これが本書の締めである。以上が第II部。

終章の視野の縮小とペティ受容の分析の不明確さは惜しまれるが、それは本書の価値を損なうものではない。伊藤誠一郎(本誌56-1, 2014年7月)が言うように、本書は「非常に豊かな物語」を編み出した。議論はスコットランドの文脈、大ブリテンの文脈、ヨーロッパの文脈を交えて展開され、宗教、政治、経済の相互連関においてシヴィック的伝統と商業文明と世界君主政・国家理性の相克が抉り出されている。あえて言えば宗教の分析が弱い(17世紀は宗教戦争の時代)が、著者は同時代の多数の論者の少なからぬ一次文献を渉猟し、個別の文脈と問題に即して各論者の思想を確定し、相互に比較しつつ論争のダイナミックな展開を描くなかで、フレッチャーの思想を浮かび上がらせており、その手腕は手堅く見事である。経済学史学会賞に相応しい作品である。

2017年6月2日

経済学史学会

経済学史学会賞選考委員会